

誰でも歩ける

中山道

上巻

六十九次

日本橋
和田宿編



Hitono Iunari

日殿言成

『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るよう設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

読み方いろいろ

- 通常は画面の「倍率」が100%前後になっていますが、「倍率」を150%まで高めると文字が読みやすい大きさになります。
- 通常は「見開きページ」で設定されていますが、「単一ページ」にすると読みやすく感じます。
- 読み進めるときは、「十字キー」を使用すると手軽です。
- 「サムネイル機能」を使用して読み進めると、2～3頁からとばし読みするのに便利です。
- 頁を「回転」させることが可能です。地図などを拡大して見るときに便利です。

[http://www.bungeisha.com/PDF is/05-top1.html](http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html) でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。

誰でも歩ける

中山道

上巻

六十九次

日本橋（
和田宿編

Hitono Iunari

日殿言成

誰でも歩ける



中山道六十九次

上卷

Hitono Inari

日殿 言成

はじめに

自然とのふれあい、何げなく過ごす毎日……。

私たち健常者と違い、一日一日を大切に、一生懸命過ごしてきた著者（実弟）の夢であり、強い望みであった「中山道」の本を、この度私は彼の生きた証として、本人に代わり世に送り出す決心をしました。

彼は十五年もの間、人工透析を続けながら、二〇〇一年には『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社刊）として、一冊の本にまとめました。その第二弾として、中山道のガイドブックを作りたくて、病氣と闘いながら、それこそ、一日一歩の思いで歩き続け、自分の足で調べながら、少しずつ記録していったのです。おかげで歴史的にも、旅日記としても、どなたにも興味をもって読んでいただけるような内容になったと、身内ながら思っております。ぜひ、多くの方々に読んでいただき、お役に立てていただければ、こんな嬉しいことはありません。

ふと、「青空が見たい」「おいしい空気が吸いたい」と思った時に、この本を片手に歩いてみたら、著者「日殿言成」の思いと感性にふれ、彼と一緒に道案内してくれるのではないかと期待してしまふのです……。

横田 広子



挿絵：横田広子

本書の使い方について

この本は、五街道のひとつである中山道の宿場と関連する名所旧跡を西暦二〇〇〇年から歩き始め、書きためた文章と地図を一つの形にしたものです。中山道を訪れてみたいと思っっている方、または、これから歩こうと計画を立てている方々の参考になれば幸いです。

本書は、五街道の起点である「日本橋」を出発点として、草津宿手前の所まで書かれております。京都方面から日本橋に向かう方には、読みにくいところもあるかもしれませんが、ご了承ください。

以前に出版した『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）は、とてもボリュームがあり、持ち歩きができるような本ではありませんでしたが、今回は、三巻に分けて出版いたしましたので、旅をする際のお供が可能になりました。

上巻は「日本橋～和田宿」、中巻は「下諏訪宿～御嵩宿」、下巻は「伏見宿～守山宿」までとなっております。草津宿と京都に関しては、『誰でも歩ける東海道五十三次』を参考にさせていただきたいと、著者が守山宿で筆をおいてしまいました。

手書きの地図は自分たちの足で歩き、メモを取りながら書きためていったものを形にしました。本という形になるまで、六年もたつてしまいましたので、旧跡、名所の読み違いや、道の変わってしまった場所も多々あると思いますが、その辺はご了承ください。

この本を参考に歩かれる方々のお力になれたら、著者も喜ぶことと思えます。

〈地図の記号一覧表〉

	本陣跡		郵便局		国道標識		松並木
	古い民家		銭湯・温泉		国道標識		杉並木
	民家 1		バス停		県道標識		役所
	民家 2		ストア		工場		県庁
	ビル		公園		一里塚跡不明		その他
	その他の家		休憩所		一里塚跡現存		遺跡
	ガソリンスタンド		踏切		杉		滝
	コンビニ		地下鉄		松		果樹園
	病院		駐車場		その他の木		梅
	喫茶店		宿泊		桜		名所・史跡
	飲食店		常夜灯		道路案内		教会
	学校		標石・石碑		道路案内		カエデ
	交番		//・kmポスト		道路案内		道の駅
	消防署・団		高札		道路案内		道路標識
	トイレ		説明板		道路案内		//
	銀行		信号		中山道碑		//
	農協		夢舞台道標		発電所		//
	寺		句碑・歌碑		見附跡		地 地 地 地 地下道
	神社		道祖神・地蔵		城址	送電線 木	
	幼稚園		石碑・道祖神		熊鈴		

〈地図の見方〉

地図はすべて日本橋を起点に京都方面へ向かうように書かれたものです。下が日本橋、上が京都方面として描かれております。

はじめに	5
本書の使い方について	6
1 日本橋	11
2 板橋宿	25
3 蔵宿	34
4 浦和宿	41
5 大宮宿	47
6 上尾宿	54
7 桶川宿	58
8 鴻巣宿	64
9 熊谷宿	77
10 深谷宿	87
11 本庄宿	98
12 新町宿	108
13 倉賀野宿	116
14 高崎宿	123
15 板鼻宿	133



16 安中宿	139
17 松井田宿	147
18 坂本宿	160
19 軽井沢宿	181
20 杓掛宿	188
21 追分宿	195
22 小田井宿	204
23 岩村田宿	209
24 塩名田宿	217
25 八幡宿	222
26 望月宿	228
27 芦田宿	235
28 長久保宿	240
29 和田宿	250
宿場里程一覧表	275
参考文献・資料	277



お江戸日本橋

「お江戸日本橋七つ立ち」と「道中唄」にも唄われたように、「日本橋」は「東海道」の起点として有名だが、ここは「五街道」（注1）すべての出発点でもあり、「中山道」もここが始まりだった。

徳川家康は関ヶ原の合戦で勝利をおさめると、まず街道整備に取りかかり、いわゆる五街道と呼ばれる五つの道を重点的に整えていった。

中山道・東山道

中山道は慶長七年（一六〇二）に整備され、道幅は広い所で五間（九メートル）ほど、普通は二間から三間ほどで（三・六メートルから五・四メートル）街道両側には土手を築いて「松」（注2）を植え、夏の日除けや冬の雪

除けにしたという。

中山道の歴史は古く、古代から中世にかけては「東山道」とも呼ばれ、かなり昔から存在していたことがわかつている。

そのことはすでに「日本書紀」にも見られ、「日本武尊（やまとたけのみこと）」が東国平定のおりに使ったことが記されている。

しかし、奈良時代以降、日本武尊が通ったという「神坂峠（みさかとうげ）」を越えて「伊奈」に至る道はしだいに「木曾路」を通るルートへ変わり、その後、江戸幕府が開かれると（慶長六年・一六〇一）「五街道」の一つとして整備され、「中山道」と呼ばれるようになった。

当初は「中仙道」と仙の字を使う事の方が多かったが、享保元年（一七一六）、幕府は仙の字を山に統一し、以後は中山道と書かれるようになったという。

それまでの東山道とはかなりルートも変更されているが、江戸時代、この道は東海道と並んで「江戸と京都」を結ぶ二大幹線道路として重要な役割を果たしていたのだ。

中山道は普通日本橋から京都「三条大橋」までを言うが、その距離はおよそ一三五里二

注1 幕府は日本橋を起点として、東海道、中山道、甲州街道（甲州道中）、日光街道（日光道中）、奥州街道（奥州道中）を整備した。

注2 松並木には夏の日除けや冬の雪除けの他に、いざ合戦が起こった時、切り倒してバリケードを作り、砦の役割をさせる目的もあったという。



日本橋のたもとに立つ日本橋由来記。



日本橋全景

四丁八間（約五三三キロ）だった。しかし、実際には「日本橋」から「草津」までを中山道と呼ぶこともあり、その距離は一二九里一〇丁八間だった。これは草津〜京都間が東海道と重なるからで、東海道は日本橋から三条大橋までの二二四里二九丁だった。

中山道は東海道と比べてみると、実際には四一キロ（本によっては三九キロ）ほどしか長くないのだが、筆者の感覚ではとてつもなく遠回りしているように感じてしまうのだ。

このような錯覚に陥る原因を考えると、明治に入ると東海道にはすぐに鉄道が敷かれ、その後も道路や鉄道、新幹線などが次々に整備されていったからではないだろうか。

ところが中山道は京都に向かうにもかかわらずいきなり北上していて、しかも東海道に比べると整備がなかなか進まなかったからだろう。日本橋を出立するとまるで逆方向に進んでいるようにも見えるから、これが中山道を長く感じさせる最大の原因のようだ。

さらに、高崎を過ぎるとどんどんと山間部に入っていくから、益々離れて行ってしまうように感じられるのかもしれない。

人にもよるだろうが、筆者にはどうしても

そんな感覚が最初にあって、とてもとっつきにくい道に思えたのだ。しかし、最後まで歩かれればわかるが、東海道に比べるとまだまだ当時の宿場の雰囲気が残っている場所も多く、歩いて楽しく、歴史が学べる道、それが中山道と言えるだろう。

一日中山道

ここで最近聞いた中山道に関する面白い出来事を紹介しておこう。

これは少し前の話のだが、とあるテレビ局の女性アナウンサーが横書きされていた「旧中山道」を一日中山道いちにちやまなかみちと読んでしまい、その後、多くの視聴者から苦情が寄せられ、怒られたというエピソードが伝わっている。

これは不注意でたまたまそのように読んでしまったようだが、全行程を歩かれれば、きっとこのアナウンサーは間違っていないのはと、なんとなく同情してしまう気がするのだ。

特に「碓氷峠」に入ってから山道が続く、「木曾」に入ればどこまでも山の中だから、一日中山道の言葉がぴったりなのだ。

これから中山道に足を踏み出すわけだが、



日本国道路元標の起点。

橋の中央分離帯のまん中と、道路元標の広場にある。



乙女の像・魚河岸跡。



道路元標の広場。

歩いているといつの間にか一日中山道になってしまふのが中山道だと覚えておかれるといいだらう。

木曾街道

ところで、東海道は宿駅（宿場）が五十三あったことから「東海道五十三次」と呼ばれていたが、中山道の方は「中山道六十九次」、あるいは「木曾街道六十九次」とも呼ばれていた。

木曾街道と呼ばれたのは長野県（信州）に宿場が二十六（注3）もあって、しかも中間部に山深い「木曾十一宿」があったからだ。

また、全体の宿場数を見ると東海道よりも一六も多いが、これは峠や難所をいくつも越えなければならぬことに関係していたようだ。

宿場数だけ比べると知らない人にはやはり中山道は遠いと感じてしまふが、実際の距離は東海道とそんなに違わなかったことがわかっていただけたのではないだろうか。

江戸時代の人々が日本橋をたつて京、大坂に向かう場合、東海道か中山道のどちらかを選ぶわけだが、東海道の方が早くから整備さ

れていたから、一般的にはこちらを通る人の方が圧倒的に多かったという。ところが、東海道には「大きな河川」が何カ所もあり、危険な川を渡らなければならなかったから、川留めで日程が狂うことも多く、「今切りの渡し」や「七里の渡し」なども待ち受けていたから、それらを嫌う人もいたのだ。

特に「女性」（注4）は危険な川越しを嫌ったと言われ、中山道が多く利用されていたようだ。

また、東海道に比べると中山道は少し遠回りになるが、順調に歩けばかならず目的地に到着できたから、わざわざこちらを選択する旅人もいたという。もちろん中山道は峠を何カ所も越えなければならなかったから、足に自信のある人向きの道だったことは確かだが、行きは東海道を歩き、帰りには中山道を選ぶ人も多かったと言われている。

歌川広重

ちなみに、「広重」は東海道五十三次（保永堂）で「朝之景」と題した日本橋を描いたが、「広重と溪斎英泉」の合作になる「木曾街道六十九次」は英泉による絵で、広重に対抗して

注3 軽井沢、沓掛、追分、小田井、岩村田、塩名田、八幡、望月、菅田、長久保、和田、下諏訪、塩尻、洗馬、本山、贄川、奈良井、敷原、宮ノ越、福島、上松、須原、野尻、三留野、妻籠、馬籠の二六宿である。

注4 女性が多かった理由は小田井宿を参照。



日本銀行・金座跡



三越のライオン像。

か「雪之曙」と題されている。

この絵は日本橋から北西方向を眺めている構図で、様々な人物が登場しているのが特徴と言えるだろう。

河岸から天秤棒をかついでくる棒手振姿の人物や大八車を押す男達、そして芸者、さらにはそれらに混じって廻し合羽で旅立つ旅人などだ。いかにも「お江戸八百八町」の賑わいを感じさせてくれるこの絵はこれから始まる旅立ちを祝福しているとも言えるだろう。

町並み

さて、前置きはこのぐらいいにして、我々もそろそろ日本橋を旅立つことにしたい。

日本橋に立って東海道と逆に踏み出せばそ

こが中山道で、現在この道は国道一七号線と呼ばれている。

日本橋を渡るとすぐ目に飛び込んでくるのは「三越デパート」(注5)で、この前身は「三井越後屋」と呼ばれた呉服商で有名だった。当時の店は江戸でも一、二を争う人気店でも知られ、ここで着物を買う事は江戸庶民の憧れでもあったという。

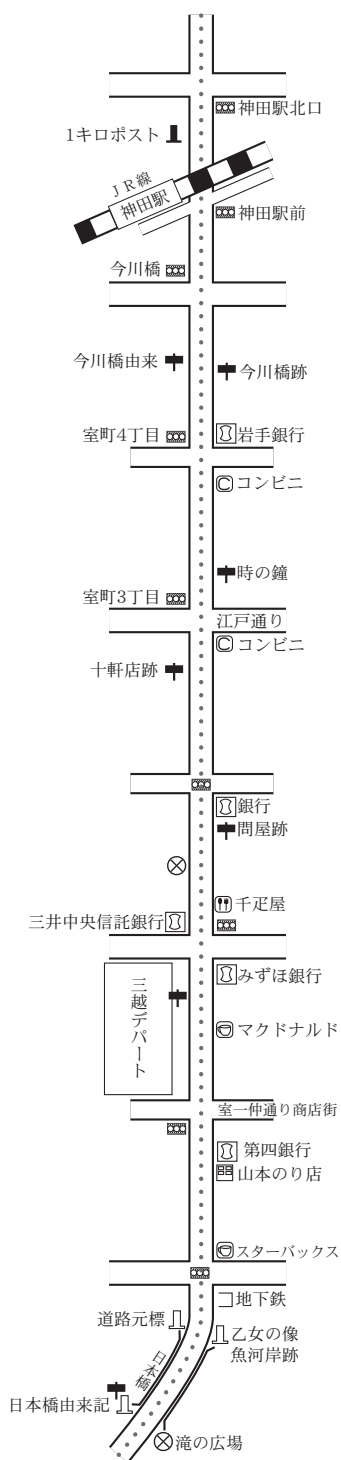
また、江戸時代この付近は「駿河町」と呼ばれていたが、それはここからいつも美しい「富士山」が見えたからだだった。今では高いビルに阻まれ、富士山を見るのは不可能だが、江戸っ子たちはここから雄大な富士山を拝んでいたのだ。

なお、三越デパート裏は当時「金座」と呼

注5 明治三七年(一九〇四)に現在のよう百貨店になった。



広重の六十九次「日本橋」の絵に見える時の鐘。現在は近辺の十思公園に保存されている。



ばれていた場所で、ここでは「小判」などの「金貨」を鑄造していた。跡地はすでに「日本銀行」（日銀）ビルや「貨幣博物館」に変わっていて、当時の面影はまったく失われたが、そんな重要な施設がこの中山道裏にはあったのだ。

元の国道に戻ると左手には「十軒店跡」の説明板も設置されているが、これはこの付近に「五代將軍綱吉」が京都から雛人形師を十人招き、ここに長屋を十軒与えたからだった。

雛人形と言えば中山道ではこれから訪れる「鴻巣宿」が有名だが、江戸時代、この付近は「鴻巣」、「越谷」とともに「関東三大雛人形」の生産地として賑わっていた。

今川橋跡

ビル街の中を歩くと「今川橋跡」も見られるが、当時ここには川が流れていて、橋が架けられていたからだった。

ここに流れていた川は江戸時代初期「井之頭池」から水を引いてきたもので、井之頭池とは三鷹市と武蔵野市にまたがる現在の「井之頭公園」のことで、公園奥には今でも源流だった「お茶の水」と呼ばれる「湧き水」が

出ている場所が残っている。すでに雀の涙ほどしか湧き出していないが、ここから引いてきた水が飲めたというのは東京に住んでいる人には想像さえできない出来事と言ってもいいだろう。

神田・秋葉原

賑やかなビル街を抜け出すと前方にJR高架が見えてくるが、ちょうど高架下は現在の「神田駅」で、高架をくぐった一帯は「須田町」と呼ばれていた。当時の須田町左手には「青物市場」があったから、この付近はお江戸の台所として賑わっていたのだ。

なお、現在の「国道一七号線」は須田町交差点を過ぎると右に曲がって電気街で賑わう「秋葉原」に出てしまうが、旧中山道はここで曲がらず、「交通博物館」脇を通ってそのまま高架と平行に細い路地に続いていた。

線路沿いを歩くと左手に「消防署」が見えてきて「昌平橋」に出てしまうが、当時は昌平橋の六〇メートルほど手前に「筋違い見附」があつて、ここに架かる橋を渡っていたという（すでにこの橋はない）。

現在の昌平橋には「昌平橋の由来」を説明



昌平橋親柱



今川橋モニュメントは向かい側ビルにも見ることができる。



今川橋跡モニュメント

した標識が見られるが、ここは「湯島聖堂」が作られた時、中国は孔子の生誕地である魯（山東省）の昌平郷にちなんでつけられたという。

交差点を渡ったらすぐ先を左折するのが道筋で、緩い上りきみになった道路左手には「湯島聖堂」、右手には「神田明神」が見えてくる。

湯島聖堂にはいかにも古そうな塀が残っているが、ここは元禄四年、「將軍綱吉」が「林羅山」の開いた私塾を移した物だという。その後、寛政二年（一七九〇）からは幕府の「直轄学問書所」となっている。

ちなみに現在の建物は昭和一〇年に再建さ

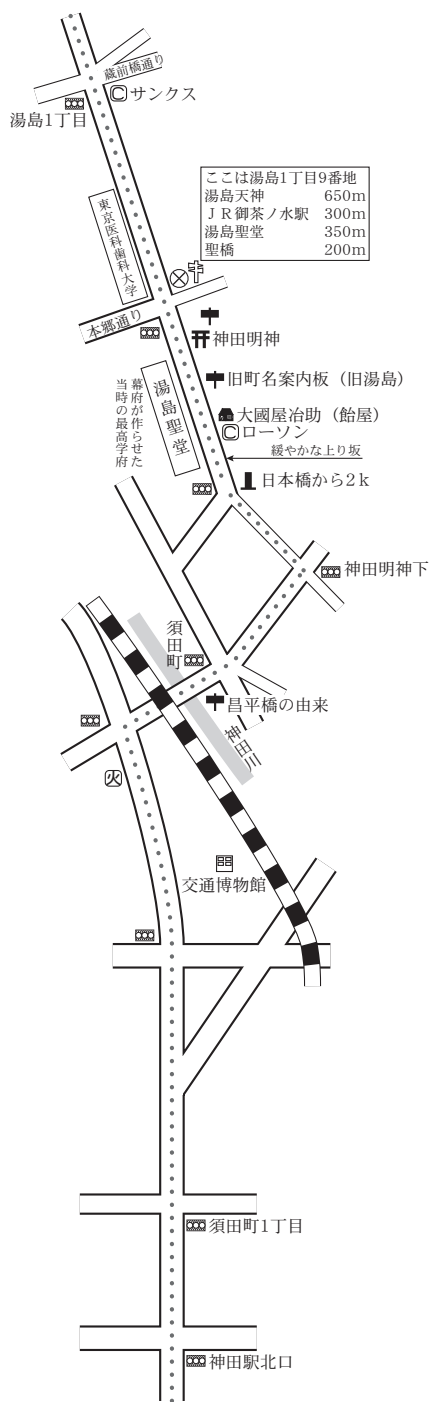
れたもので、塀もその頃のものだという。

また、湯島聖堂向かいに見られるのが「神田明神」で、ここは江戸っ子達の人気がとても高い神社で有名だった。

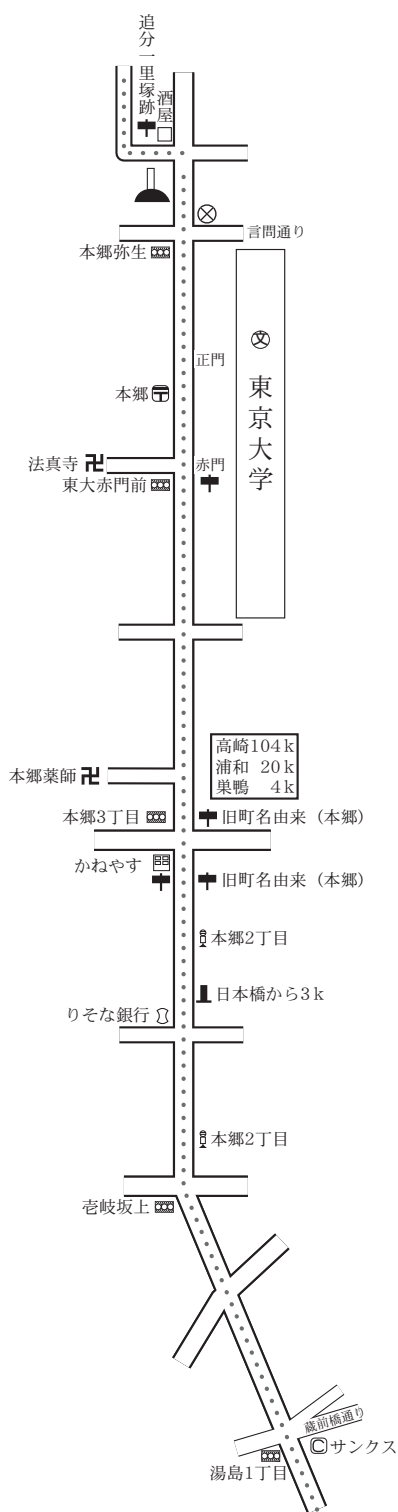
元々は現在の大手町一丁目付近にあったが、江戸城拡張に伴ってここに移ってきたという。

神田明神と言えば、筆者などはすぐに神田明神下の「銭形平次」と口ずさんでしまうが、この神田明神、元々は「平将門」の霊を祀るために建立されたのが始まりという。

ちなみに、当時江戸の祭りと言えば「神田明神と赤坂日枝神社」が有名で、共に「天下祭り」とも呼ばれていたが、特に神田明神は將軍家が武蔵国総社兼江戸城下の総鎮守とし



神田明神の歴史は古く、天平2年（730）の創建と言われる。神田祭は5月に行われる。



たため人気が高かった。

神田明神を出ると左手に見えてくるのは「東京医科歯科大学」ビルだが、ちょうどこの裏が「御茶の水」で、昔はここからきれいな「清水」が湧き出でて「將軍家」に献上され、「お茶」に使われたからこの名がある。

また、先に見えてくるのは「東京大学」で、手前を右手に入ると三大將軍家光の乳母で絶大の権力を握っていた「春日の局」の墓所「麟祥院」や受験生で賑わう「湯島天神」もあるから、これらも時間があれば立ち寄ってみるといいだろう。

赤門

東京大学は元「加賀前田家」上屋敷があった跡で、こんなにも広大な敷地を持っていたとはちょっと驚きだが、ご存じのように江戸時代の加賀藩は「加賀百万石」でも知られる強大な権力を持っていたからだった。

堀沿いを歩くとすぐ見えてくるのが有名な「赤門」で、ここは十一代將軍「家斉」の娘である「溶姫（すいひめ）」が前田齋泰に嫁いだ時に建てられた物だという。現在は国の「重要文化財」にも指定されていて、多くの学生が赤門をくぐって校舎に向かうのだ。



文政10年（1827）前田齋泰に嫁いだ11代將軍家斉の息女溶姫のために建てられた朱塗りの御守殿門。現在、重要文化財に指定されている。

途中省略

本編はダウンロード時間短縮のため省略版でお届けしています。
途中省略なしの完全版をご希望の方は製品版をご「購読」ください。

著者プロフィール

日殿 言成 (ひとの いいなり)

日殿言成はペンネーム。

昭和26年東京は麻布（現在は六本木）の生まれ。

大学卒業後、某ファミリーレストランの店長などを務める。

その後、腎臓病で入院。平成2年から人工透析を始める。

平成17年5月永眠。

著書に『誰でも歩ける東海道五十三次』（文芸社）がある。

誰でも歩ける中山道六十九次 上巻 日本橋～和田宿編

2006年9月15日 電子出版発行

著 者 日殿 言成

発 行 者 瓜谷 網延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-10-1

電話 03-5369-3060（編集）

03-5369-2299（販売）

<http://www.boon-gate.com>

© Hiroko Yokota 2006 Coded in Japan

ISBN4-286-01565-3

（文芸社発行の通常書籍（紙の本）については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」サイト、<http://www.bungeisha.co.jp>を御参照ください。）

新 06.08.31 CAPS